

自立した学び手の育成

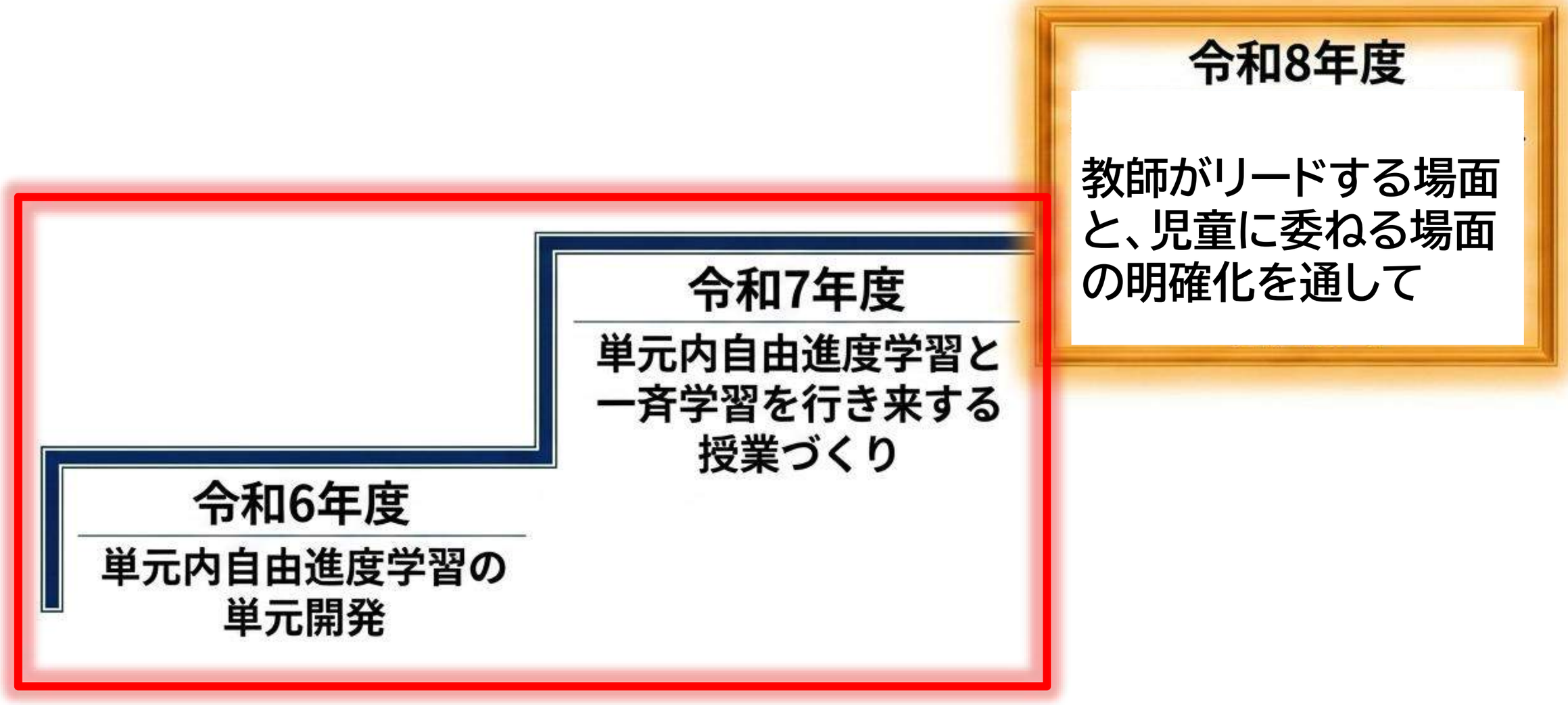
「リード」と「委ねる」を明確に位置付ける指導の工夫を通して

発表の骨子

１．３年間の研究の経過
２．具体的取組み
　　（１）昨年度までの授業課題と手立て
　　（２）教材研究
３．今後について

令和8年度 研究主題

自立した学び手の育成
～教師がリードする場面と、児童に委ねる場面の明確化を通して～



世羅町立甲山小学校3年間の研究ロードマップ

昨年度の自由進度学習の様子









世羅町立甲山小学校3年間の研究ロードマップ

令和6年度

単元内自由進度学習の
単元開発

令和7年度

単元内自由進度学習と
一斉学習を行き来する
授業づくり

令和8年度

教師がリードする場面と、児童に委ねる場面の明確化を通して

昨年度までの成果と課題

成果：学びを自ら調整する力の向上



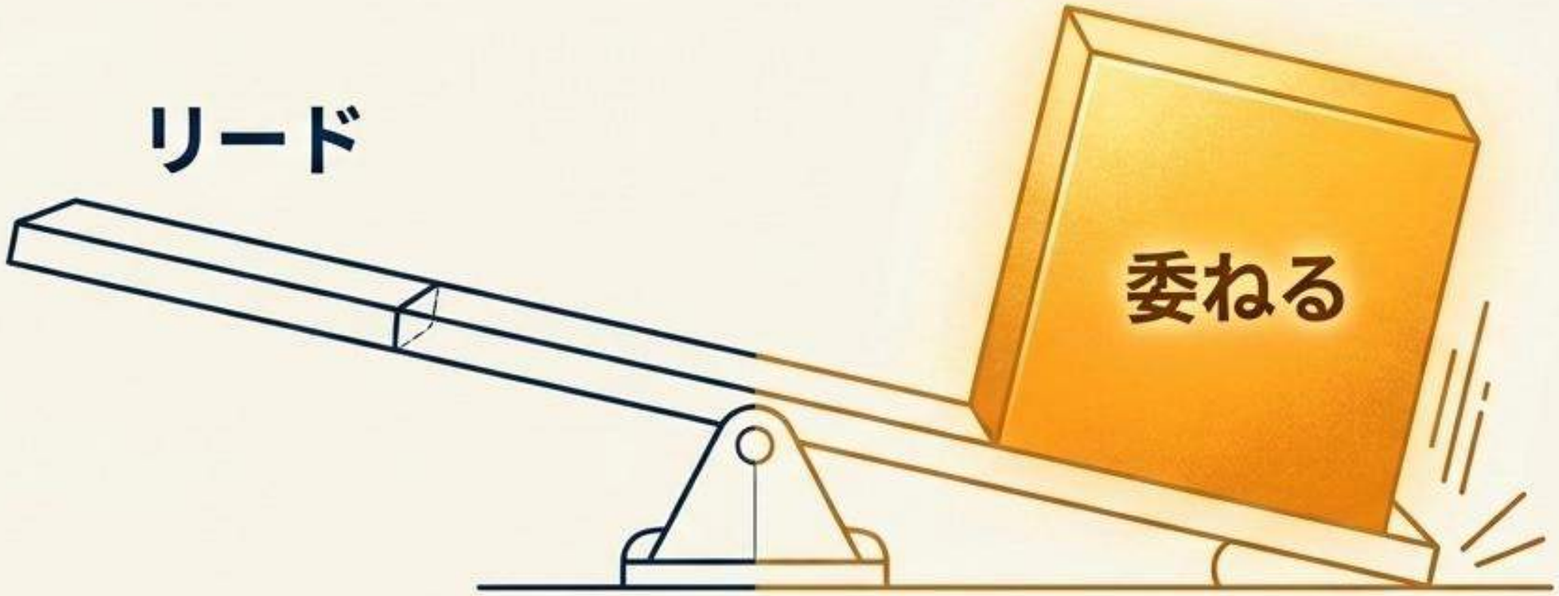
一部の児童や学年においては自ら調整する力を高めることができた。

課題：算数科の学力が十分に定着できていない

50%

昨年度１月実施の標準学力調査（算数科）において、全国平均を超えた学年が学校の半数に留まる

課題の根本原因



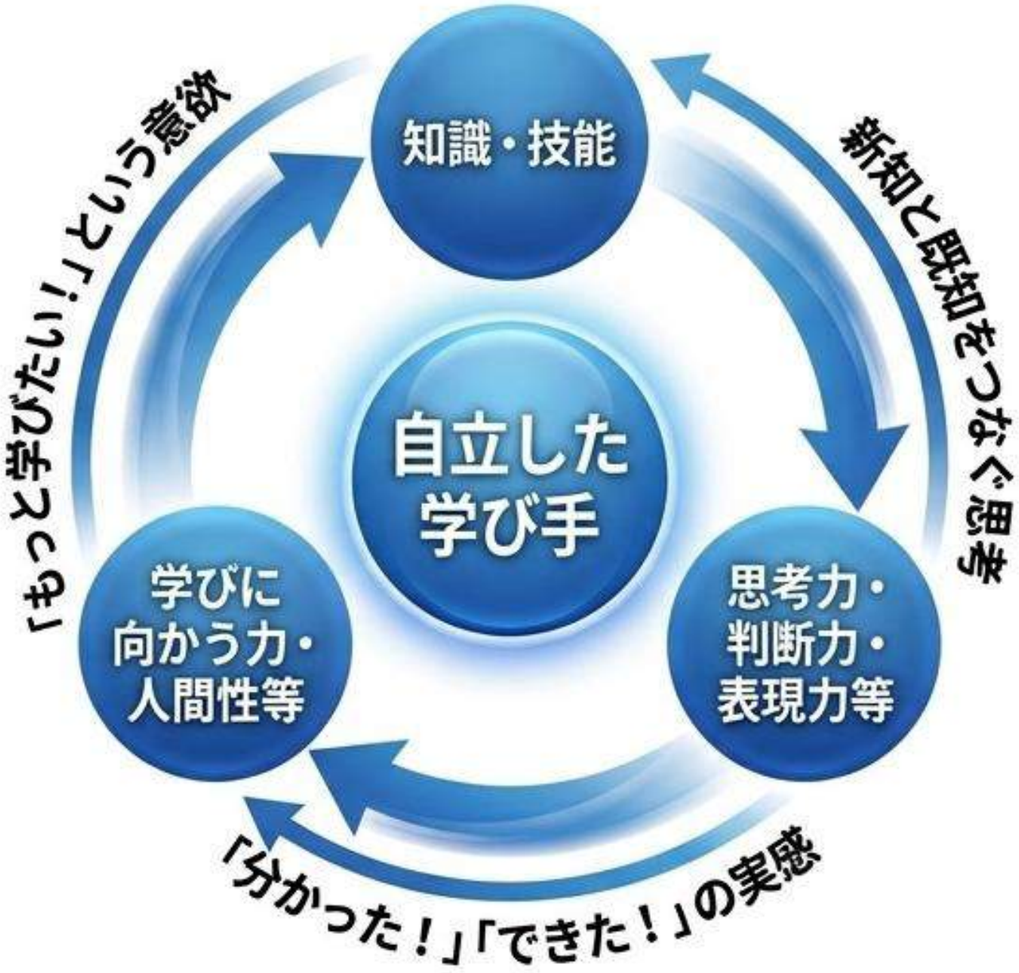
原因①：委ねることへの偏重

学習活動を「児童に委ねる」ことを重視しすぎた結果、時と場に応じた教師の「指導・助言」が十分に行えなかった。

原因②：一斉学習の停滞

自由進度学習への注力の一方で、授業の大半を占める一斉学習の改善が進まず、学力を保証する教師の適切な手立てを講じることができなかった。

「自立した学び手」の再定義



これら三要素が互いに関連し合い、バランスよく育成される
『学び』の中で、児童は自立した学び手として育っていく。

本年度の研究仮説：「リード」と「委ねる」の明確な位置付け

教師がリードする場面
（意図的な足場掛けと方向付け）

児童に委ねる場面
（自己決定と自己調整の場の保障）



これらを学習活動の中で明確に位置付け、個の実態に応じた指導の工夫を図れば、自立した学び手の育成につながり、確かな学力が定着するであろう。

授業展開における「リード」と「委ねる」のイメージ図

教師の強固な足場があるからこそ、児童に委ねることができる



実践の焦点：算数科における4つのアプローチ

課題が最も顕著であった算数科に焦点を当て、問題把握から自力解決までのプロセスを分解して考える。



① 前時の復習

② 問題把握

見通しをもつ

④：自力解決

①【前時の復習】　視覚的な振り返りをする

【課題】既習事項を言語化しにくい

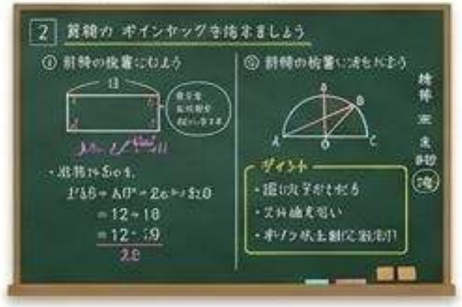
【これまで】言葉だけの振り返り

前回は何をやりましたか？

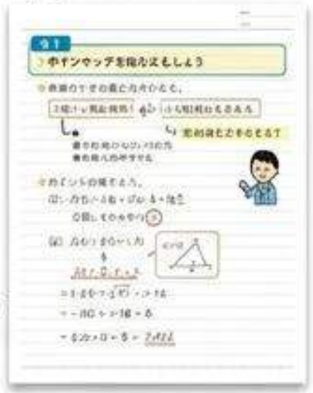


【手立て】視覚的な足場の提供

前時の板書写真



ポイントが
書かれたノート



前学年の問題や前時のノートを
視覚的に提示し、思考を整理する

②【問題把握】「読解力の差」を算数のつまずきにさせない

【課題】冒頭で意欲を失う

【手立て】キーワードの視覚化・量感の確認

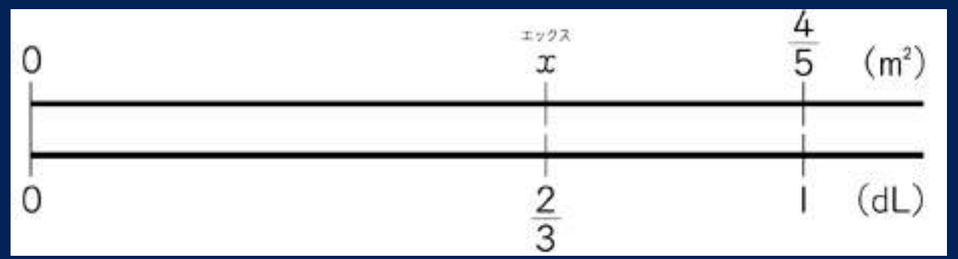
1 dLで、板を$\frac{4}{5}$ m²ぬれるペンキがあります。

このペンキ$\frac{2}{3}$ dLでは、板を何 m²ぬれますか。



1 dLで、板を$\frac{4}{5}$ m²ぬれるペンキがあります。

このペンキ$\frac{2}{3}$ dLでは、板を何 m²ぬれますか。



③【見通しをもつ】「受け身」の学びの姿勢を変える

【課題】見通しが立たず、自力解決が停滞し受け身になる



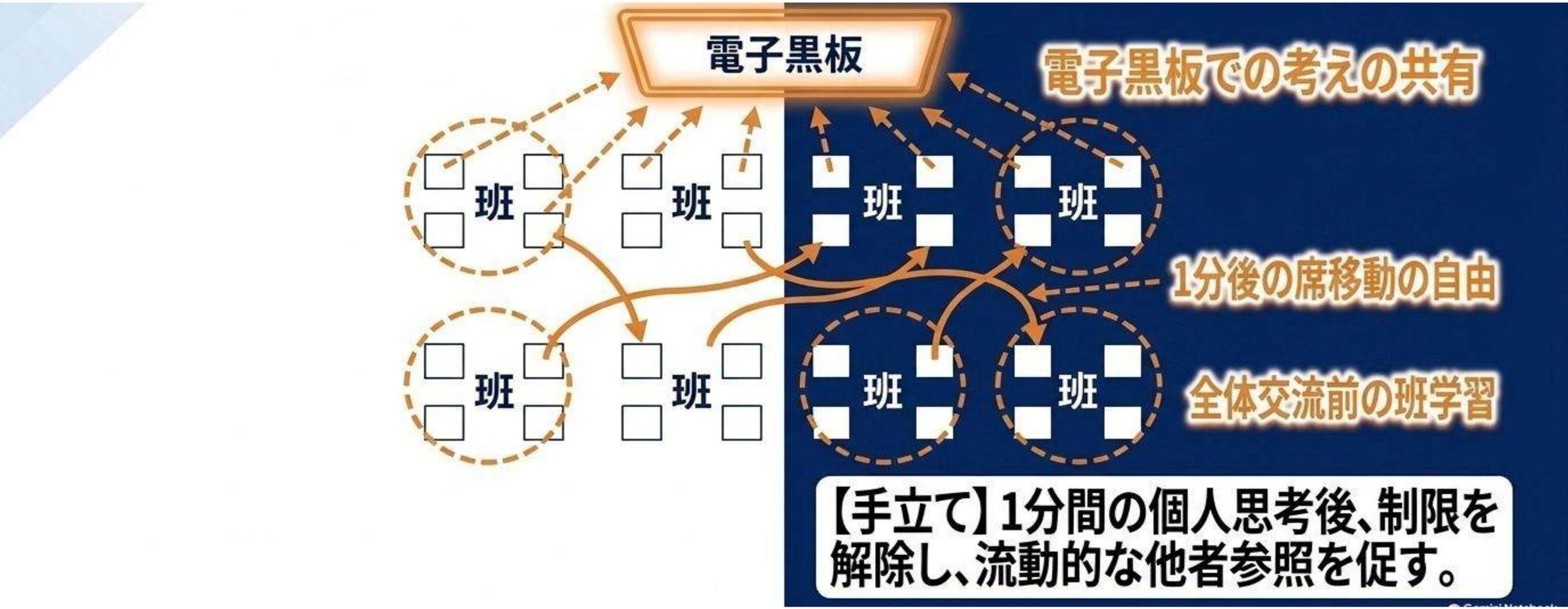
【自力解決（1）】全員が到達する「レベル1」の設定

【課題】自力解決が不十分で、集団解決への意欲を失う



【自力解決(2)】他者参照を促すための工夫

【課題】自分の考えの妥当性が分からず、全体交流に生かせない



教師のリードを支えるための研修

質の高い「委ねる」を実現するための、教材研究と構造的な板書計画の作成

①【単元を通して身に付けるべき力の明確化】



- ✓ 単元を通した数学的な見方・考え方の明確化
- ✓ 1時間の重要ポイント（着眼点）の設定

6　指導と評価の計画（全6時間　本時3／6）

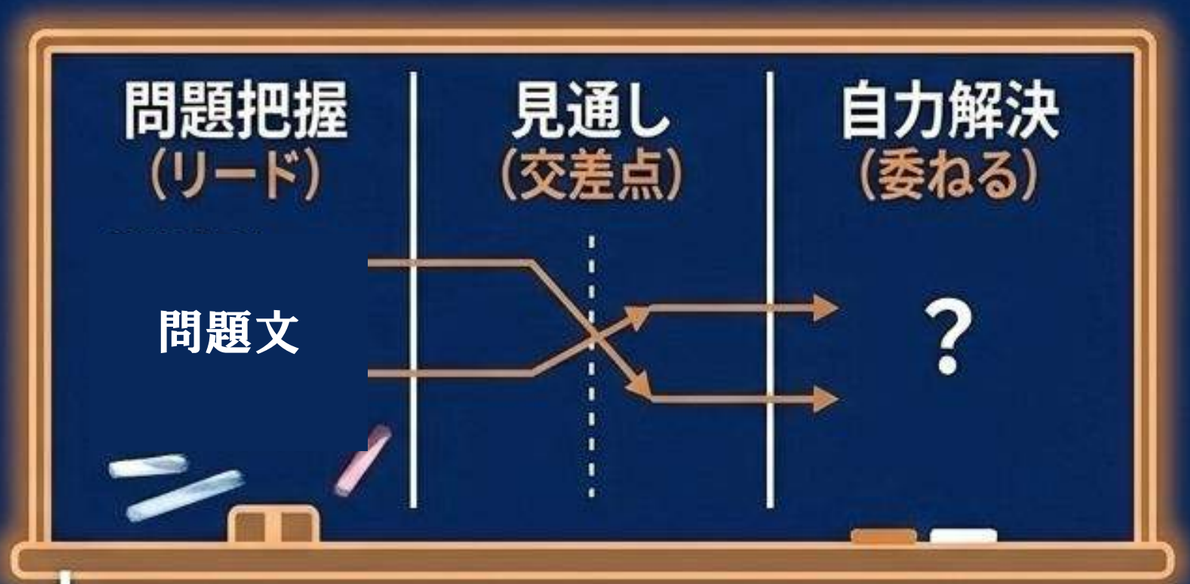
時	本時のねらい	学習を関連付ける着眼点
1・2	・円のおよその面積を求めることができる。	①面積の求め方を既習の図形の面積公式を基に考える
3（本時）	・円の面積を求める公式を理解する。	
4	・多様な方法で円を含む複合図形の面積の求め方を考え、図や式を用いて説明することができる。	②円を含む複合図形は、既習の求積可能な図形に変形して考える
5	・単元の学習の活用を通して事象を数理的にとらえ論理的に考察し、問題を解決する。	
6	・学習内容の定着を確認するとともに、数学的な見方・考え方を振り返り価値づける。	

指導案の
「6　指導と評価の計画」
にも、学習を関連付ける
着眼点として記載した。

教師のリードを支えるための研修

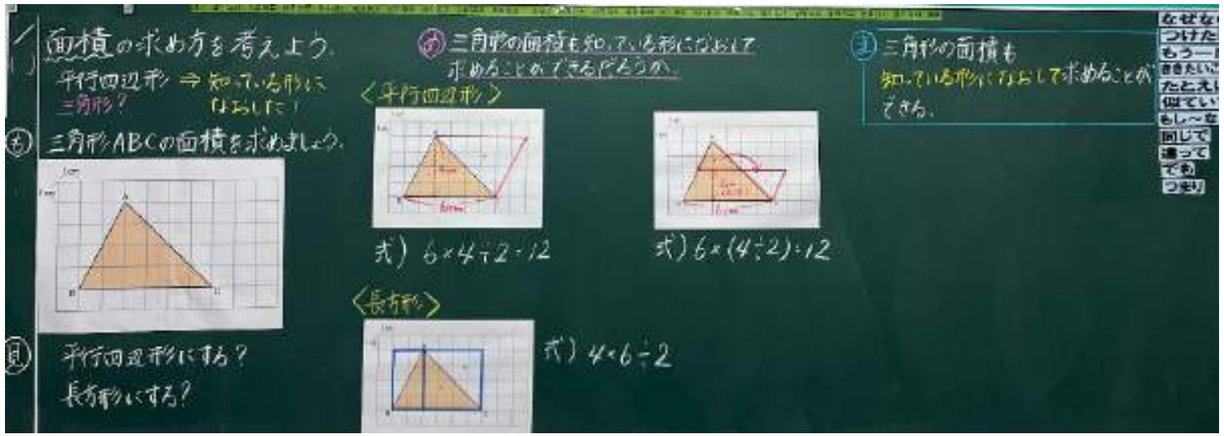
質の高い「委ねる」を実現するための、教材研究と構造的な板書計画の作成

②【板書研修】



委ねた時に「児童の思考の支え」
となる、思考の流れの可視化

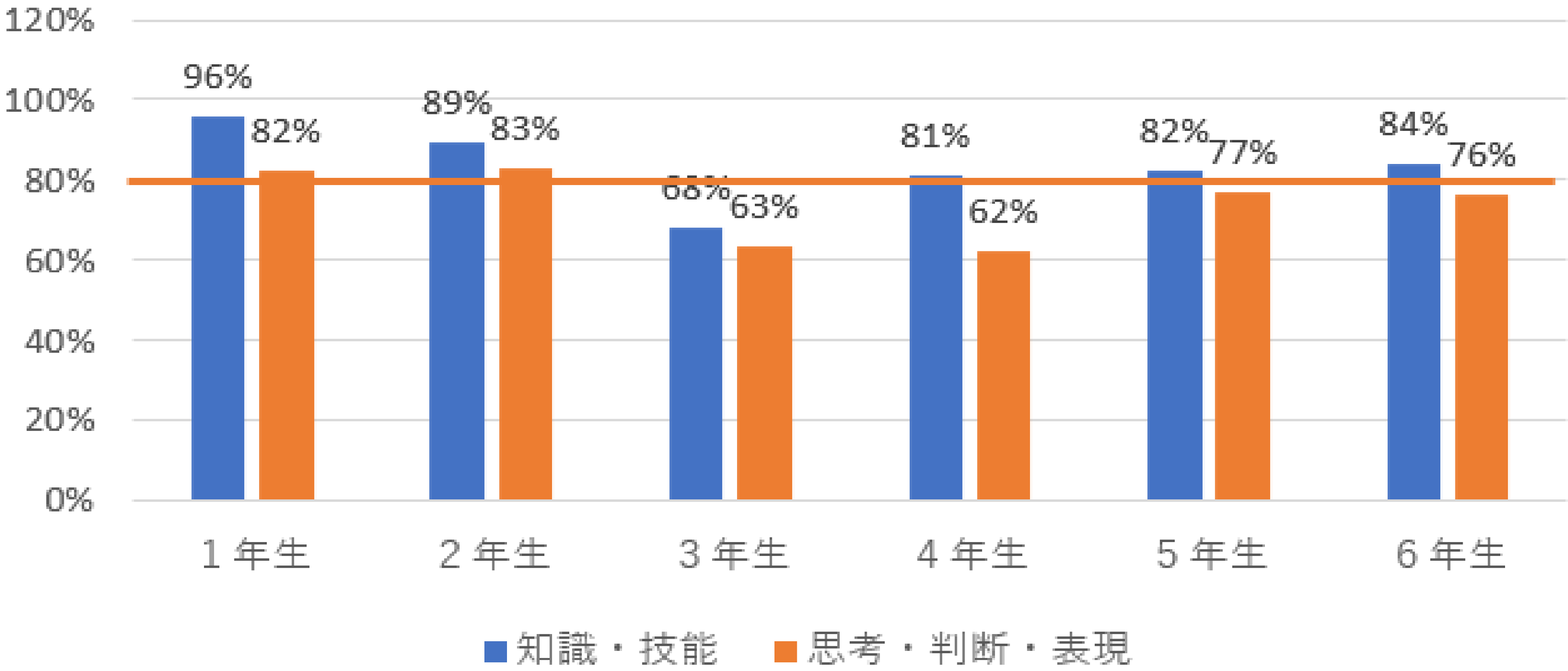




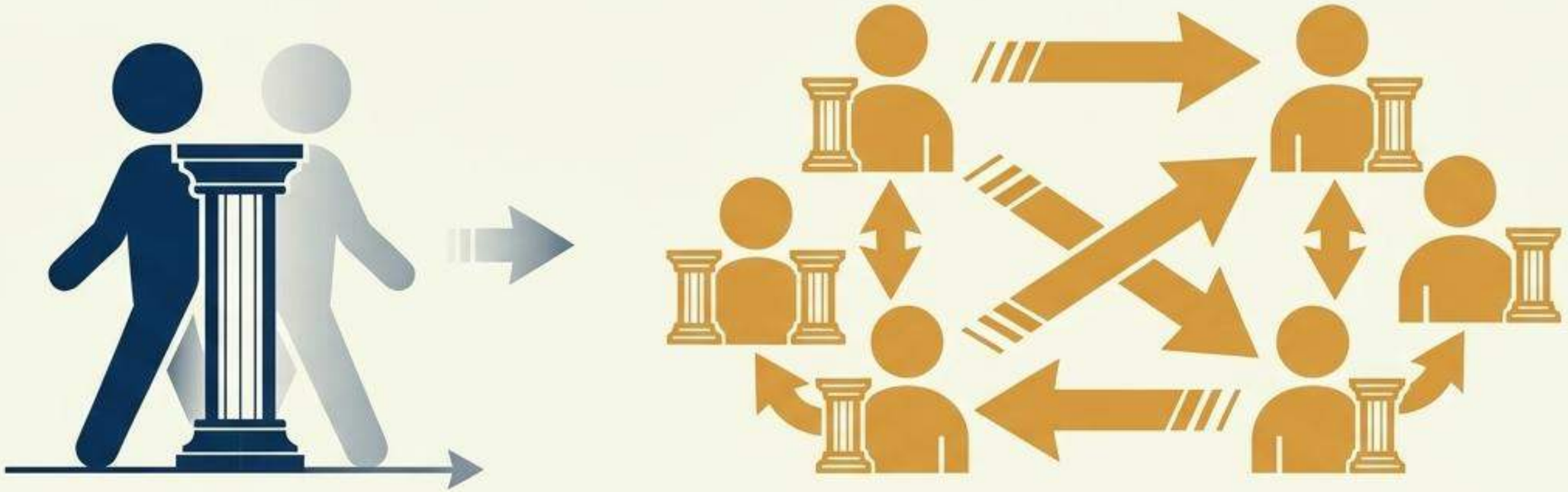
3．今後について

令和8年度1学期間　算数科の単元末テストの結果

（知識・技能）及び（思考・判断・表現）で80点以上の児童の割合



今後に向けて



現在の成果

「リード」と「委ねる」場面を
意識的に作る共通認識の確立。

次の挑戦

「全体交流」でいかに教師が我慢し、児童に委ねられるよう育て、導くか。
教師の発言で展開する授業ではなく、児童の発言で展開する授業を目指していく。